令和6年度

でじま

第28号

長崎県国際理解教育研究会

巻　頭　言

長崎県国際理解教育研究会
会 長　吉 田　由 美 子
（長崎市立愛宕小学校）

長崎県国際理解教育研究会と私の出会いは、平成15年2月の冬のセミナー後に派遣への壮行会をしていただいたときでした。その後、私は、平成15年度～17 年度の3年間、台湾高雄の日本人学校に赴任いたしました。赴任中、会員であった友人が台湾を訪ねてくださったことも懐かしく思い出されます。

帰国後、私は、本会会員として活動を始めましたが、当時から、夏の総会・帰国歓迎会、そして冬のセミナー・壮行会が実施されていました。帰国したばかりの私たちは、大学の公開講座で赴任地の話をしたり、長崎県国際交流フェスティバルでブースを設けて活動を紹介したりする取組も行っていました。そして、もう一つ大きな取組が会誌「でじま」の発行です。

本誌は、当時から、全海研の全国大会や九州ブロック大会の研究報告、帰国者や派遣地からの報告に加え、本会の事業報告等を掲載しておりました。平成28年度までは、冊子として印刷し会員や関係者に配付しておりました。今回、第28号からホームページへの掲載とし、会員以外でも海外派遣や国際理解教育に関心のある方々に広く御紹介できる機会となりましたことを大変喜んでいるところです。

また、令和8年度には全海研九州ブロック大会が長崎県で開催されるに当たり、今年度から、その準備を始めているところです。九州ブロックでは、①在外施設での取組・帰国後の取組、②各県の国際理解教育の取組、③各県における国際交流・国際協力の取組、④ICT を活用した授業づくり・学級づくり・学校づくりの取組、の四つのテーマで分科会が開催されます。令和7年度は、九州ブロック大会に向けた準備としても、再度本会の活動を見直しながら国際理解教育並びに海外子女教育・帰国子女教育・外国人子女教育について研究を深め、その充実に努めてまいりたいと存じます。本誌の発行が、今後の本会の活動を活性化するとともに、より多くの志を同じくする方々が集うことの契機となればと祈念しております。

最後になりましたが、本誌に記事を寄せていただいた派遣中の皆様方、発刊に御尽力いただきました役員の皆様方に衷心から感謝申し上げて、巻頭言といたします。

目 次

1. 研究に関する報告

九州･佐賀大会参加報告　伊藤 淳一郎 ･･････ 1

2. 帰国報告

前広州日本人学校　川村 翔太 ･･････ 2

前香港日本人学校香港校　中村 圭介 ･･････35

3. 派遣地報告

デュッセルドルフ日本人学校　川上 登 ･･････45

ニュージャージー日本人学校　吉田 優 ･･････49

香港日本人学校香港校　兼松 諒 ･･････53

第27回九州ブロック海外子女教育・国際理解教育研究大会佐賀大会報告

長崎県国際理解教育研究会
事務局長　　伊藤　淳一郎

標記大会が、令和６年８月18日（土）に鳥栖市において、「国際社会に目を向け　多文化共生社会を切り拓く児童生徒の育成」の大会主題のもと開催され、事務局長として参加したので、その報告をする。なお、長崎県からは第２分科会に、仁田佐古小学校教頭　亀川貴光先生が発表者として参加された。

【8月17日（金）】 於：サンメッセ鳥栖

大会前日に九州ブロック理事会が開催された。

まず、九州ブロック大会の申し合わせ事項の確認がなされて、福岡→佐賀→熊本→長崎→大分→宮崎→鹿児島→沖縄の順に開催されていくことが確認された。（長崎県次回開催は令和8年度）また、分科会のテーマとしては、全海研と同様に、①在外教育施設での取組・帰国後の取組（シニア派遣も含む）②各県の国際理解教育の取組③各県における国際交流・国際協力の取組、④ICTを活用した授業づくり、学級づくり、学校経営の4つに分けて開催していくことが確認された。（今年度は、各県の発表希望者が①に集中したことから①の分科会を3つに分けて実施）

次に、佐賀大会のデーターから順にUSBで各県に引き継いでいくことが確認された。このように、各県の蓄積をもとに運営できるようになったことは、非常に大きいことだと感じた。その後、各県の現状などの情報交換が行われ、夜のレセプションでも各県の交流が深められた。

【8月18日（土）】 於：サンメッセ鳥栖

まず、午前中は10時から開会行事が行われ、基調提案、実践報告、分科会、指導助言が行われた。実践報告は3分科会に分かれ、本県からは第2分科会で亀川先生がイスラマバード、バルセロナの2度にわたる派遣報告を行った。午後からの全体会では、「カリブの夢」という演題で、公益財団法人佐賀県国際交流協会　理事長　黒岩春地氏による記念講演が行われた。閉会行事では、佐賀県の会長のあいさつの後、次回開催県の熊本県の会長から「ぜひ来年は熊本県で会いましょう」というあいさつがあった。

今回の佐賀大会はサンメッセ鳥栖という鳥栖駅から徒歩3分という立派な施設で行われており、とても素晴らしい環境で行われた大会となった。そして、佐賀の役員の皆様のホスピタリティと団結力が素晴らしく、そのことが、佐賀大会の成功につながったと感じた。2年後の長崎大会に向けて、自分たちが取り組んでいかなくてはいけないことを明確にして、いい準備をしていきたい。

佐賀大会が盛会の内に終了できたことを、心よりお祝い申し上げ、報告に代える。

国際理解教育研究会

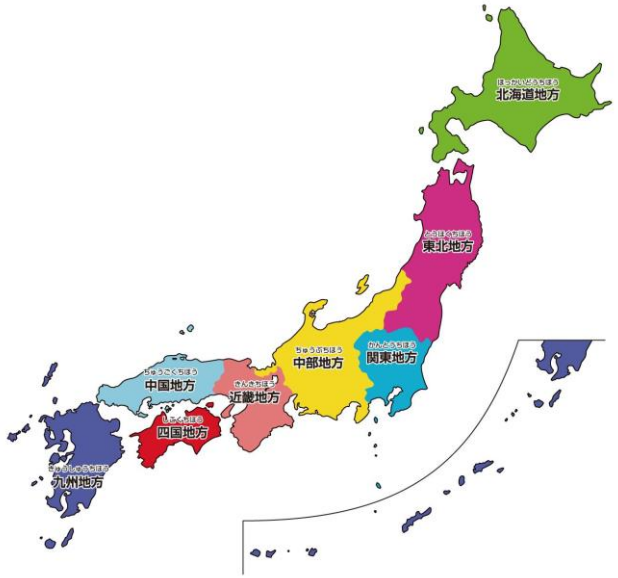
長崎市立西坂小学校 教諭 川村翔太

令和6年度 7月20日

中国にどのような
イメージがありますか？

空気が汚い
列の順番を守らない
日本人に対して攻撃的
怖いなど

どちらかというとマイナス？



生活して感じた中国という国

なぜ中国に？

- 日本人学校の教員として２年間派遣が決まったため。
- 偶然中国の『広州市』という都市に。
- 派遣が決まったのが２０１９年１２月。

⇒２０２０年２月にコロナが中国(武漢)で大流行。

派遣が延期に・・・

９月１８日にようやく中国へ✈

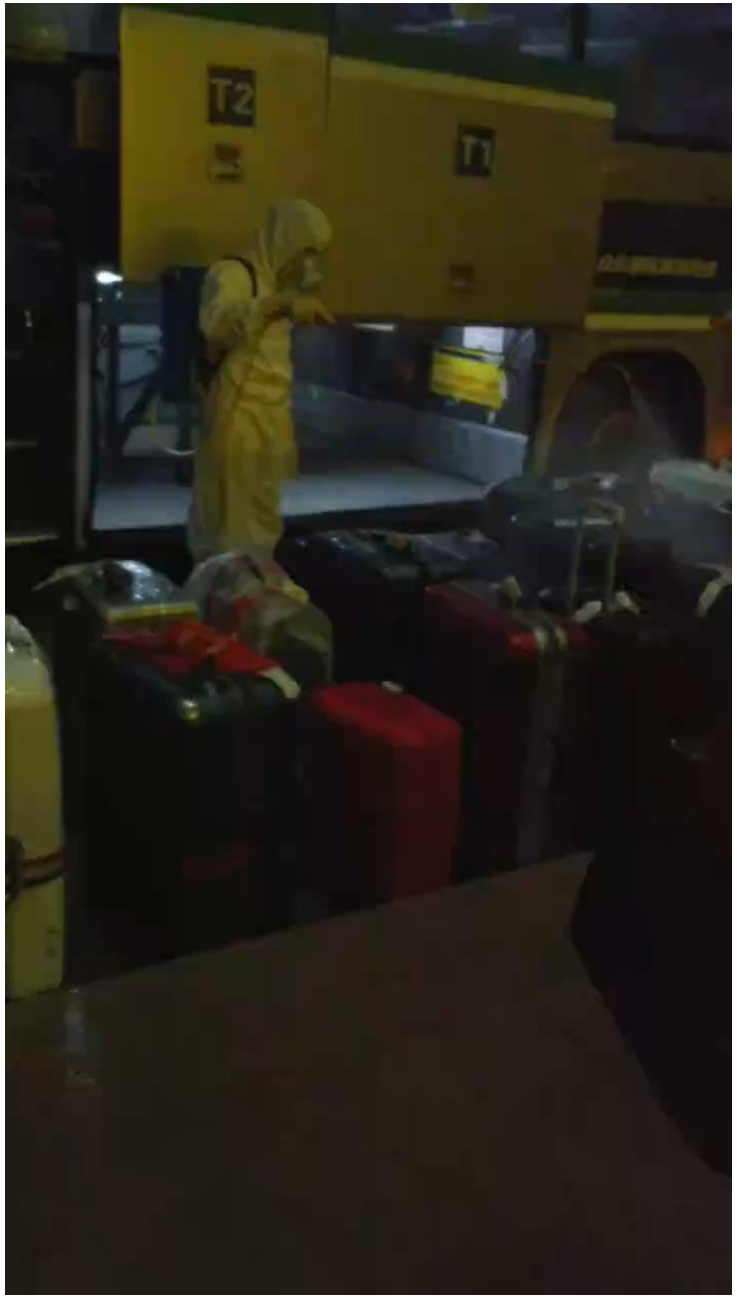
そこから地獄の２週間、隔離生活へ

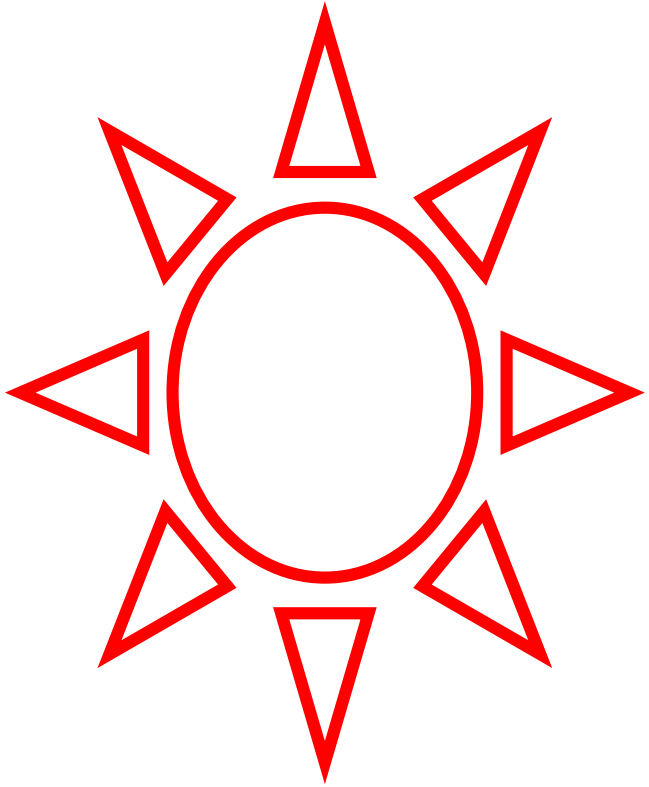
逸皇冠酒店
逸皇冠酒店

中国に到着後

空港では、職員みんな防護服
空港到着後PCR検査
隔離ホテルまで移動
昼過ぎについて
ホテルの部屋に入ったのが
深夜12時すぎ
荷物(段ボールも含む)も全部
消毒

まだ、この時期はコロナに
感染するのが絶対悪でした。
犯罪者扱い。





この青空を
忘れることは
できません(T_T)/

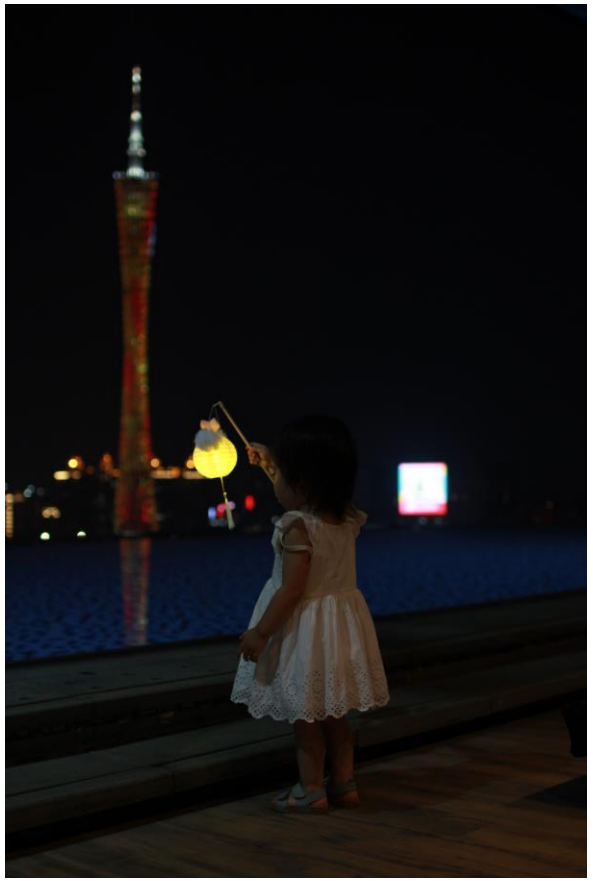
どこに行くにも必要な陰性証明

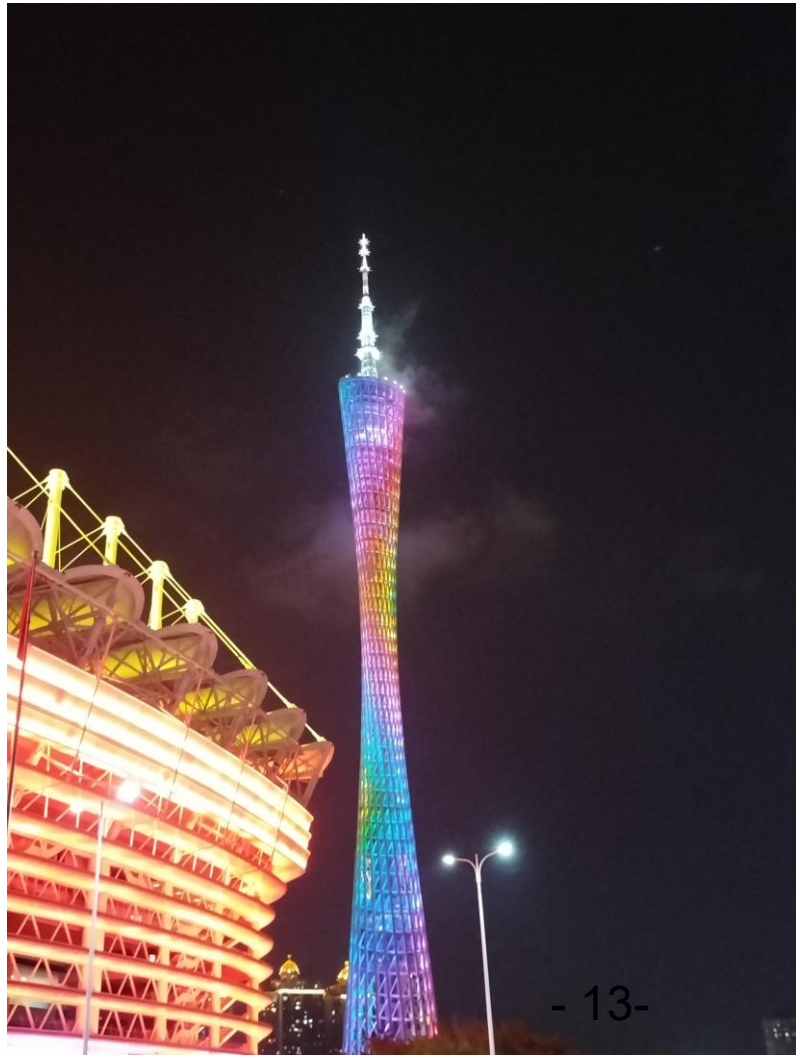
どこのお店に入るにも必要だった陰性証明
QRコードをスキャンして陰性を証明できないと
お店に入れない。
お店だけでなく自宅帰る時も陰性証明を出す
必要があり。
そのために2日に1回PCRを受ける。
受けないと緑の陰性証明が黄色に。
黄色だとどこにも入れない。もちろん家にも
赤色になると強制的に隔離ホテルへ！

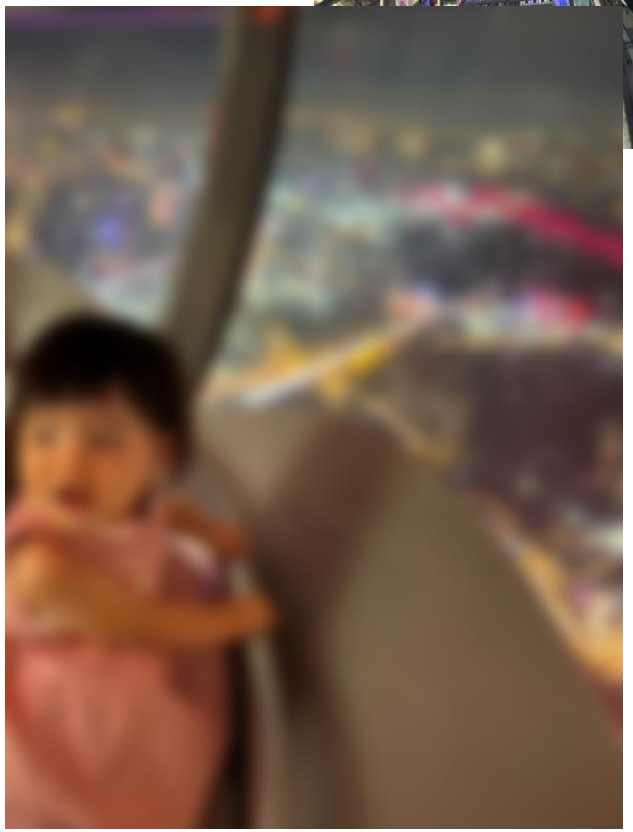
中国での生活

中国と言ったら🐼

広州のシンボル！広州タワー



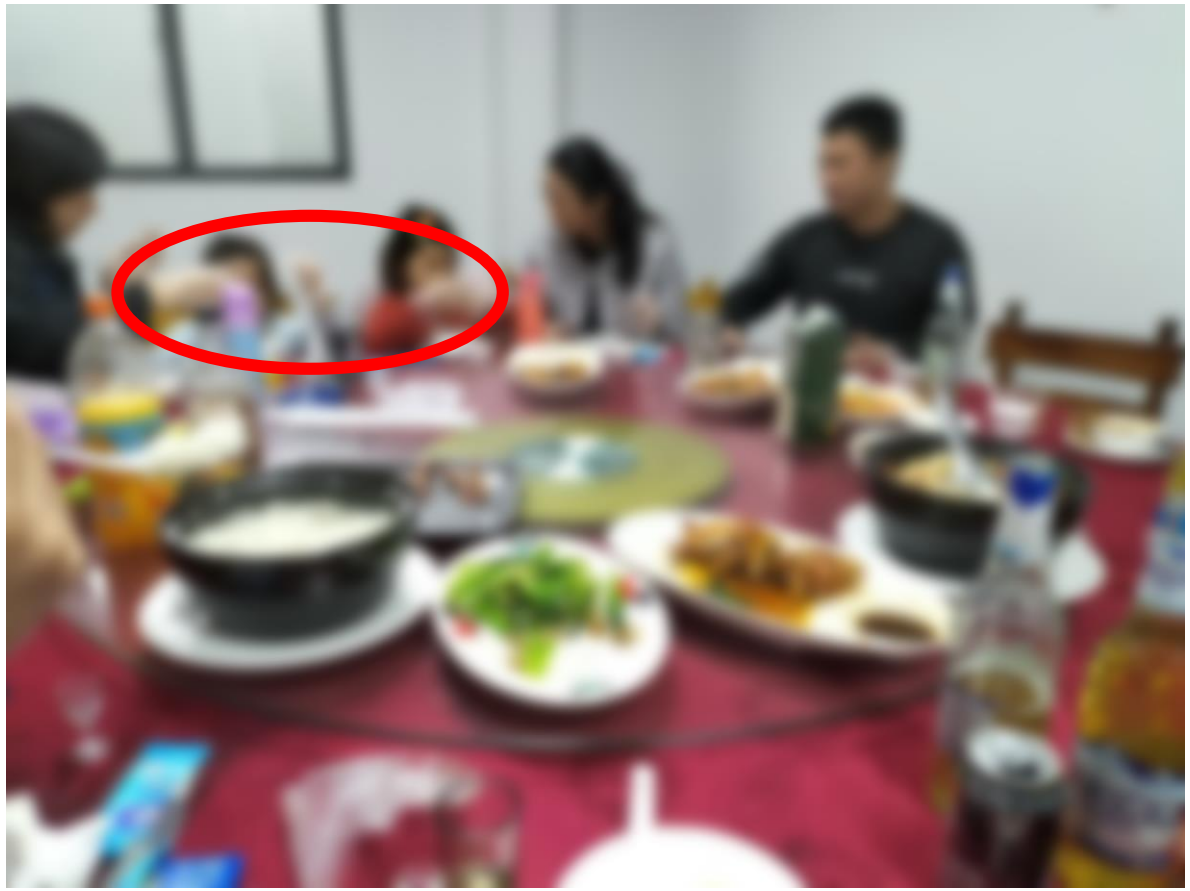




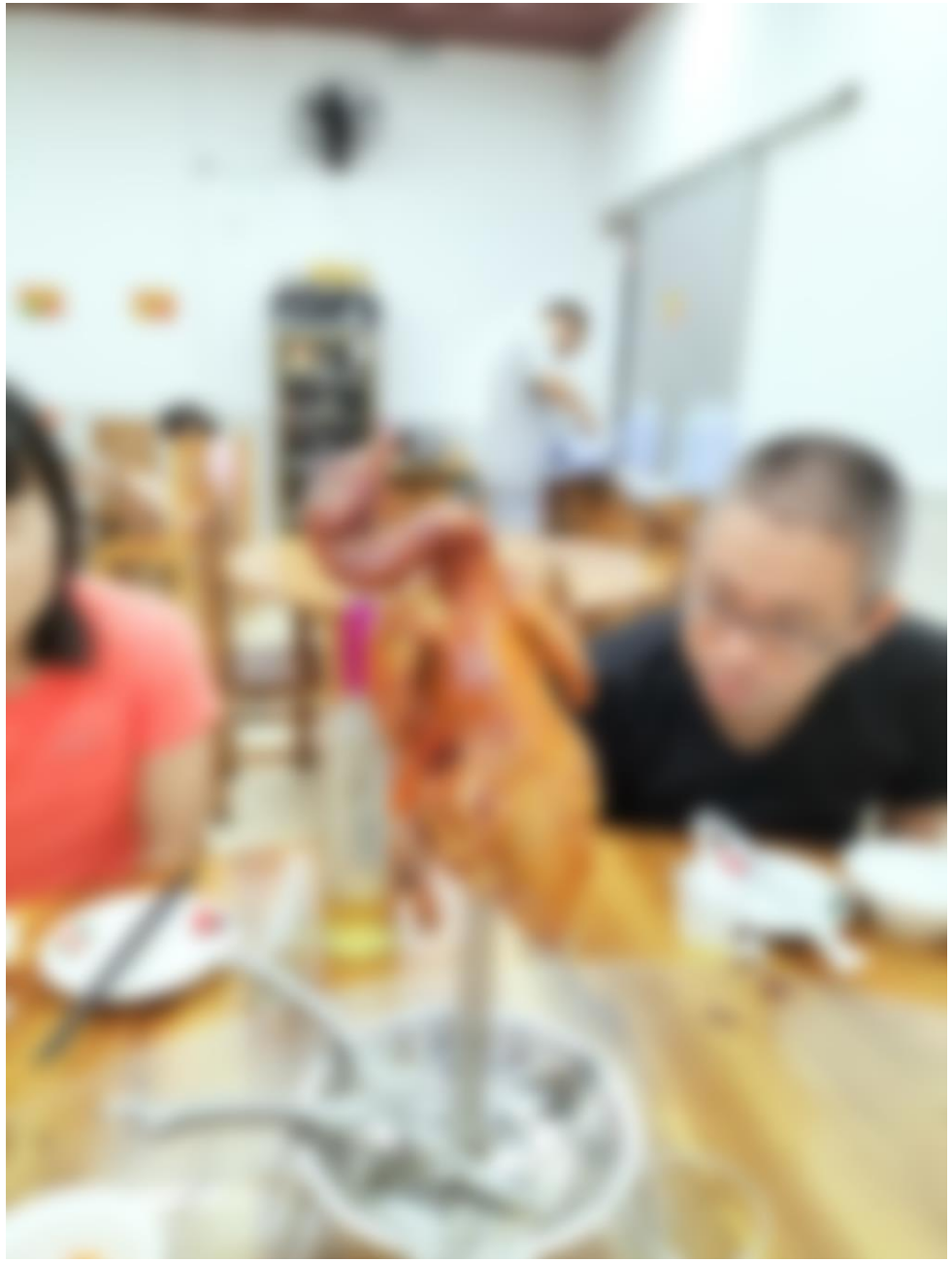
食について

〇中華は残すのが礼儀である⇒実際は現在はその考えは薄い。
しかし、中華は量が多い。残すというより食べきれない。
〇しかし、中国人が食べた後の席は汚い。日本人のようにきれいに食べるという意識はない。
〇日系企業も多く進出している→吉野家、すき家、博多一幸舎、各種コンビニ等
中国人が営む、なんちゃって日本食屋も多くある。大抵は美味しくなく、高い。
〇ローカルのお店は信じれないくらい安くて美味しい。
何が入ってるかよく分からないこともありますが、、、

中華は少人数では行かない！！



何と！頭付きが普通！？



本場の火鍋

中国ならでは・・・

DIARY
KUNGFU FROGGY
必吃美味日记
DIARY
THE KUNGFU FROGGY
再点涮菜
自选配菜

The local 料理

近所のラーメン屋さん
日本円で約300円くらい
味も最高でした(*^^*)

まさかの
日本円〇〇円！
日本ではありえない

フルーツが南国！

中国人が見る日本人

〇実際に住んでみての感想になるが、歴史やニュースで報道されているようなマイナスな感情を抱いていない。若い人は日本にリスペクトしている。アニメなどしかし、年配の方や田舎の方(特に北に行くにつれて⇒南京など)は危険だと聞いた。実際に日本人学校に石や卵を投げ入れられることがあったらしい。その他、事例もあり。。。

〇子ども連れには、とてつもなく優しい♪バスや地下鉄では、絶対に席を譲ってくれる。公共交通機関は毎日激混み。

〇意外と並んで待つ。

〇タクシー運転手は必ず「お前は韓国人か？」と聞いてくる。

中国での教育実践

学級経営で大切にしたこと!

様々な都道府県から集まる教育者

・広州日本人学校は、小中一貫校
・中学校の生徒と行う活動や行事も多い。
・特色のある授業としては「全学年中国語の授業」「外国語All English」「高学年の外国語は中学校の教員」「6年生の理科と社会は中学校の教員が授業」「低学年から外国語の授業」など
・現地校との交流も行われている。
・3月初めに卒業式。すぐに、帰国する児童が（教員も）いるので、授業は、日本よりも2～3単元早く進める。→毎日の授業が勝負！
・教育委員会がないため、日々の先生方との研究、研修が自己を高める鍵。いろいろな実践をもつ先生方が全国から集まっている。お互いが刺激し合えていた。

日本人学校の特徴！？

•転出入が多い！

→コロナの渦だったこともあり、一時帰国者や退学者もたくさんいました。
少し落ち着いてからは、中国に戻ってくる児童生徒もたくさんいました。

・毎学期が新しいクラス！

→毎学期、各学年7～8人以上が入れ替わっていた状態。

「つながり」を意識した学級運営！

- 全国から集まる児童。
- 考え方や言葉(方言)も違う。
- 受けていた教育（進度も含めて）も違う。
- 海外での生活に不安がある児童も多い。

↓

違いを認め合い、「つながる」大切さ！

つながる＝心を１つに＝同じ目標をもつ

アレンジを加えて、目標をレベルアップしていく！

２人跳び→２１８回

３人跳び→１０９回

中国での教育実践

人とのつながりを生かす！

積極的に日本人コミュニティーへの参加

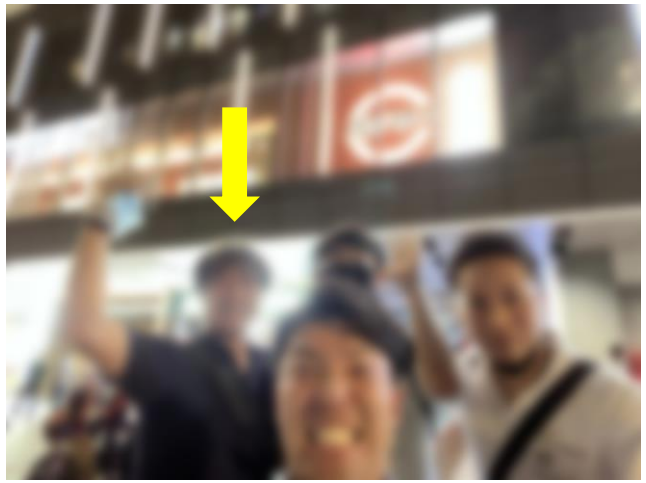
日本人が集う、サッカーチームに参加！
様々な企業の方々との交友関係を広げることができました。
教育に関する考え方も様々。自分の視野を広げることができました。ここで築いた交友関係や考え方を、教育に生かすことができました。

つながりを生かして①

○大企業「トヨタ」さん
5年生は校外学習で自動車工場見学。
その他「日産」「ホンダ」など車会社が中国(広州)に進出している。

〇ちなみに校外学習には・・・
3年生⇒「明治」「イオン」
4年生⇒「領事館」など日本では考えられない校外学習に出かけられる。

つながりを生かして②



だれもが知る大人気チェーン寿司店「スシロー」中国第1号店(2021)が広州に誕生！
今では中国全土に42店舗

中国の責任者の方と繋げてもらい、授業に来てもらえました。

つながりを生かして③

大塚製薬

現地で活躍される弁護士さん

まとめ

いろいろな企業の方と交友関係をもてた。

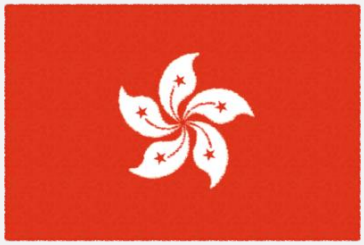
教育者としての視野を広げることができた。

全国に教育(教員だけではなく)の仲間ができた。

「外から見る日本」という新たな視点がもてた。

御清聴
ありがとうございました。

MY NEW WORKING STYLE



THROUGH LIVING ABROAD IN HK & WORKING IN HKJS

HONG KONG JAPANESE SCHOOL VICE PRINCIPAL

NAKAMURA KEISUKE **ALEX**

TOPIX

1　私たちの派遣校

(1) 香港

(2) 香港日本人学校

2　コロナ禍の私たちの海外派遣

(1) 香港政府のコロナ対策-ゼロコロナ

(2) 教育局と衛生署の学校教育ガイドライン

3　私の日本人学校でのマネジメント

(1) HKJS Staff & Students

(2) 危機・安全管理

(3) 人材管理

(4) 施設・設備管理

4　私の香港生活　My Life in Hong Kong

1　私たちの派遣校　Hong Kong & Hong Kong Japanese School

(1) 香港　中華人民共和国香港特別行政区　Hong Kong Special Administrative Region

◆面積：1,104 ㎢　　◆人口約:約 734.6 万人（2022 年）

◆通貨 HK$（1HK$≒20.5￥ ＊2024.7/5）　　◆公用語：広東語・英語・北京語

かつてイギリスの植民地だったが、1997 年 7 月 1 日に中国に返還された。（7 月 1 日は返還記念日として祝日である。）その際、イギリスと中国は 1 国 2 制度という高度な自治を約束したが、現在、政治的には徐々に中国化（大陸化）が進んでいる。一方、経済的には世界の金融センターとなっており、ＨＳＢＣやＢｏＡ、ＢｏＣ、ＳＣ等、多くの金融機関が集中している。香港を連想するとき、多くの人が高層タワーをはじめとする都会的なイメージを思い浮かべるが、それ以上に海や山の自然が多く、都会と自然がうまく調和・共存している都市である。ただし、居住エリアが限られているため、多くの人々は高層マンションの一室に住んでいる。居住空間は非常に狭い割に家賃が非常に高額である。住居費を賄うために、香港人の多くは夫婦共働きで、家事や子どもの養育は「アマ」と呼ばれる家政婦に依存している。街には世界中から集まった多くの人であふれかえり、広東語・北京語だけでなく、英語やスペイン語、日本語などさまざまな言葉が飛び交う非常に国際性・多様性に富んだ国際都市である。

「**最も国際性に富む世界大学ランキング 2024**」は、香港の特色をよく表している。この指標は大学の国際性・多様性に焦点をあてたものである。そこには第 1 位の香港城市大学をはじめ、香港にある 5 大学のうち 4 大学が上位１０位内に位置している。香港にある残り 1 つの大学も１５位にあり、香港の大学・学生がいかに国際性豊かであるかを示している。香港の学生はグローバル人材として世界から注目されているといっても過言ではない。日本の最高位は東京工業大学の第９１位となっており、香港とは対照的な結果である。

(2)香港日本人学校 Hong Kong Japanese School(HKJS)

日本人学校は香港に 3 校あり、私が派遣された学校が、主に香港島に居住する児童と香港に住む中学生が通う香港日本人学校香港校である。（九龍半島側の児童が通うタイポ校、純粋なインター校である国際学校がある。）最盛期の 1990 年代には 3 校合わせて約 2,100 人の児童生徒を擁していたが、近年の香港における経済的地位が低下したことやデモの激化、新型インフルエンザ SARS の流行、そしてコロナウィルスの感染拡大の影響等により、香港から撤退する企業が相次ぎ、児童生徒数はここ数年で急激に減少している。

香港校には小学生児童が通う小学部と中学生が通う中学部が併設し、香港の中心部ハッピーバレーの丘の上に学校がある。現在、小学部児童約 230 名、中学部生徒約 120 名の合計 350 名が在籍し、教育目標「世界で活躍するグローバル人材の育成」を掲げ、小中連携を密に図りながら、それぞれの教育活動を進めている。

香港校の最も大きな特色の一つは、小学部のグローバルクラス（ＧＣ）である。小学部４～６年生の各学年に、ＧＣがそれぞれ１クラスずつ設置されており、日本人スタッフと English スタッフによるイマージョン教育（国語・社会は日本語で、算数・理科・図工は英語で授業を行うスタイル）が行われている。一方、中学部は、日本の学習指導要領に準拠した、日本の中学校と変わらない教育を受けることができる。卒業後はほとんどの生徒が日本の高等学校に進学し、帰国する。現在は二重国籍（特に、日本人と香港・中国人のハーフ）の生徒が増加傾向にあり、卒業後の進路も多様化しつつある。

日本人学校に通う生徒とその保護者の最大の関心事は学力向上と進路である。日本と異なり、上級学校の情報が入りにくいため、必要な情報を適切に提供する進路指導が求められている。しかし、生徒の生育環境が非常に多様なため、進路指導は非常に困難を極める。生徒それぞれの自己実現を支援する進路指導をどのように進めていくか、この点が本校の大きな課題の一つである。

2　コロナ禍の私たちの海外派遣　Overseas Dispatch of Covid-19 Disasters

(1) 香港政府のコロナ対策-ゼロコロナ

① 入国時のホテル強制隔離

日本を出国し、香港に入港した令和３年４月７日から４月２８日までの３週間（合計２１日間）、私たち令和３年度文科派遣者は狭いホテルの一室に強制隔離された。この期間、外出はもちろん、ドアの外に出ることも禁止された。ホテル隔離中、衛生署による簡易検査や電話による容体確認など、徹底した防疫措置が実行された。この隔離期間中に、既に１学期が始まったため、私たちはホテルからオンラインで着任式や入学式をはじめ、授業や会議に参加した。

② マスク常時着用

食事以外、常にマスクを着用しなければならなかった。着用していない場合は、公共施設や公共交通機関の利用停止、罰金などの措置があった。

③ ワクチンの完全接種

ワクチン接種の規制が厳しくなるにつれ、接種しなければならないワクチンの回数が増えていった。一応、ワクチン接種は任意とされてはいたものの、飲食店利用の際、出勤の際に指定されていた回数のワクチン接種をしていなければならなかったため、実質的にワクチン接種は必須事項であった。香港内で接種できるワクチンは 2 種類（ドイツ製ビオンテック、中国製シノバック）あったが、日本人学校のスタッフは全員ドイツ製のワクチンを接種した。最終的にワクチンは一人 3 回接種することで完全接種とみなされた。

④ 密集制限

最も規制が厳しいときは、公共の場で 4 人以上の集団で集まることが禁止された。

⑤ アプリケーション-安心出行

ワクチンの接種状況を証明するために、香港政府のアプリ「安心出向」をインストールし、ワクチン接種の履歴を登録する必要があった。飲食店では入り口に設置された IC リーダーにアプリをタッチし、入店の可否が決定された。また、自分が利用した飲食店でコロナ感染者が出た場合、お店の利用履歴が追跡され、後日、アプリを通じて強制検査の指示が出された。この命令に従わない場合、高額な罰金が科せられた。本校職員もたびたび強制検査の指示を受けていた。

⑥ その他

〇 フラットの強制隔離　〇 夜間の飲食店の利用禁止（最も早い時間帯で 17:00 閉店）

〇 公共の体育館・運動場等の施設利用禁止 〇出勤、登校する際の簡易検査実施

⑵教育局と衛生署の学校教育ガイドライン

香港政府教育局と衛生署から定期的に更新された学校教育に関するガイドライン（規則等の通知文）が香港内各学校に発せられた。事務局からは原文そのままの状態で管理職に送付されるため、翻訳と内容の解釈をしなければならず、非常に大変であった。

① 座席の制限

対面座席となっている特別教室の使用は原則としてできなかった。そのような教室を使用して授業を行う際には、生徒にフェイスシールドを着用させた。また、教室では生徒間の机の距離は最低 1.5m 以上とされたため、グループ学習はほとんどできなかった。

② 共有制限

放課後に職員総出で教室の消毒を行った。基本的には教材の共有は禁止されており、どうしても共有せざるを得ない iPad などの備品や教材は、使用のたびに消毒した。感染拡大防止措置のために必要とはいえ、大きな負担となった。

③ 集会と対面活動の禁止

大人数での密集が禁止されていたため、集会は基本的にはオンラインで実施した。限られた人数を集めての集会においても、対面で活動することは禁止された。

④ 学習内容の制限

保健体育科では水泳の学習が禁止された。また、バスケットボールなどの接触を伴う種目の学習が制限された。音楽科ではリコーダー等の吹奏系の楽器の演奏が禁止された。体育大会や合唱発表会、野外での校外学習や宿泊を伴う修学旅行等の行事が制限された。

⑤ 教育活動の制限

ワクチンを接種した生徒の割合が 9 割以上で、その学校・学年・学級の活動が緩和された。例えば、ワクチン接種を完全接種（3 回）した生徒の割合が 9 割以上の学級から、教室で食事を摂ることが許可された。反対に、ワクチン接種率が低い場合は教育活動が大きく制限された。部活動や校外学習の実施もワクチンの完全接種が条件となっていたため、そのような活動においては、参加条件としてワクチンの完全接種を付記せざるを得なかった。

⑥ 来校制限

保護者を含め、部外者の学校内への立ち入りが制限された。学校の教職員やスタッフにおいても、学校内に入るにはワクチンの完全接種が原則とされた。

⑦ 密集制限

活動場所の最大許容人員に対し、集合可能人数はその 2 /3 以下とされた。これは例えば、体育館に入る人数が最大 300 人とした場合、体育館に集合できるのは 200 人までであった。一時期は、学校に登校できる人数も制限し、2/3 ルールを適用し、 2 つの学年が登校し、 1 つの学年に対してはオンラインで授業を行った期間もあった。

⑧ 昼食制限

教室で昼食を摂ってはいけない時期もあったため、特別教室で食事を摂らせた。ただし、場所の確保が非常に困難であったため、小学部と中学部で昼食時間をずらして対応した。小学部は給食→昼休み、中学部は昼休み→給食という具合である。

3　私の日本人学校でのマネジメント　The Role of Vice Principal

(1) HKJS Staff & Students

本校に限らず、在外教育施設の性質上、そこで働くスタッフの出身地が多様であることが挙げられる。本校では日本人スタッフをはじめ、現地香港・中国人スタッフ、そして主に English を担当する英語圏出身スタッフが働いている。採用形態もさまざまであり、私たち文科省からの派遣者や海外子女教育振興財団を通じて採用される学校採用職員、そして現地で学校が直接雇用する現地採用職員に大別される。このような職場においては言わずもがなではあるが、それぞれの立場に敬意をもち、円滑な人間関係を築く努力が必要不可欠である。多様な職員間協働を促していくのはチームリーダーである教頭の非常に重要な役割の一つである。特に、現地採用職員は特殊な立場であり、給与待遇面も他の職員よりも厳しい状況にあるため、一層の配慮が必要である。本校では中秋節や生誕節、旧正月等、彼らにとって重要な祝日前日は早めの退勤、現地の風習の一つである利子（ライシー）を振舞うなどの対応を行った。また、現地採用職員の中には日本語を話せないスタッフも多いことから、挨拶や基本的な日常会話は広東語や英語を使う等、できるだけコミュニケーションをとるよう心掛けた。

在籍する生徒も最近は多様化の傾向がある。これまでは在籍する生徒の多くは日本から派遣される駐在員帯同子女であったが、近年ではさまざまな理由から香港から撤退する企業が増えていることや、保護者のインター校志向が相まって、私が勤務した令和５年度に至っては帯同子女の割合は約５割にまで低下した。その一方、増加の一途を辿っているのが現地在住日本人と香港・中国人の親を持つハーフ、いわゆる二重国籍をもつ生徒である。これらの生徒は学校では日本語で会話を行うが、家庭では広東語や北京語、英語でコミュニケーションをとっている。そのような生育環境から語学力が堪能で、体育面や文化面で優れた技能を有する一方、日本の学力の土台となる国語力や道徳性・社会性に課題があり、集団生活になじめないところもあった。また、片方の保護者とは日本語での会話が困難な場合もあり、十分な連携を図ることができないこともあった。このように、多様な環境にある生徒に学習支援や生活指導を行うにあたっては、個に応じたきめ細かな対応が求められる。

〈多様な成育歴をもつ生徒・保護者への対応例〉

〇生徒理解に基づく信頼関係づくりに努める。褒めて認める指導を基本とする。

〇保護者との連絡を密に行う。（本校では学校と家庭の連絡用アプリ Sgrum を用いた。）

〇保護者と日本語の会話が成立しない場合、香港人スタッフによる通訳を依頼する。

〇休み時間や授業中に常に職員がフロアに待機して見守り、突発的な事態に対応する。

〇関係機関（在外公館や経営理事会）に相談し、助言や指導をいただく。

〇入学時（新学期）、保護者に誓約書を書いてもらう。出席停止や退学規定を明確にする。

〇小学部在籍中に授業参観や情報交換を行い、生徒の特性を把握する小中連携。

〇校則を順次見直す。日本的な校則の一部廃止。

〇学習内容に配慮して指導を行う。（特に社会科の授業では事実に基づいた指導を行う。）

⑵ 危機・安全管理

在外教育施設の性質上、特に危機・安全管理は非常に重要であった。定期的な危機管理マニュアルの見直しと共有、年に３回の避難訓練を行った。在外公館とも連絡を取り合い、緊急時の無線訓練も実施した。学校には昼間２名、夜間１名の監視員（ウォッチマン）がおり２４時間体制で警戒にあたった。例え保護者であっても許可証がなければ校舎内へ立ち入れないほど、厳重なチェック体制があった。教頭の役割としては、危機管理マニュアルの見直しと更新、避難訓練の計画、事務局や関係機関との連絡が挙げられる。同じようなことは日本の学校でも当然行ってきたが、これまでの経験が全く役に立たないくらい厳格なもので、隙のない危機管理であった。その中でも、一番重要だったのが、迅速な情報の展開と共有である。派遣１年目はこの点が全く不十分だったため、教職員からも厳しい指摘を受けた。すべてが確定してから情報を連絡するのではなく、逐一、現時点情報や今後の見通しをすばやく共有することが求められた。学校には児童生徒をはじめ、多くの職員が働いている。これらの人々の安全を確保するために、教頭は先を見通してすばやく関係機関と連絡・調整しながら危機回避のマネジメントを行わなければならないことを学んだ。

⑶ 人材管理

限られた人材を効果的に活用し、教育効果を最大限に引き上げる人材管理は管理職、特に教頭の大きな役割の一つである。教頭がどのような人材管理を行ってきたかを簡単に示したい。

① 校長との **Connections**

教頭は常に校長とコミュニケーションをとりながら、校長の描くビジョンを共有し、その実現のための具体的な戦略を確実・着実に職員に浸透させることが重要である。

〇課題を共有し、対応を協議する。　〇校長と校内人事を行い、校務分掌を決定する。

〇報告・連絡・相談を密に行い、情報を共有する。

〇学校採用職員の面接に参加し、学校採用職員を採用する。

② 教職員との **Connections**

教頭は常に職員室のリーダー（キャプテン）としての自覚をもち、職員とのコミュニケーションを大切にして、職員との信頼関係づくりに努めなければならない。一人一人の頑張りを褒めて・認めて、労いながら職員のモチベーションアップを図るとともに、協働的体質の強固なチーム作りを進める。また、日ごろから職員の様子をよく観察しながら、気になる職員には声をかけ、悩みや相談事がある場合には親身に対応する。不平や不満があればしっかり

と聞いて、そのガス抜きを行うとともに、外部からのいわれのないクレームに対しては身を挺して、断固として対応するなど職員を守ることも必要である。

〇職員を守る。　〇職員指導・育成に努める。　〇相談事には親身になって話を聞く。

〇校長の経営方針の浸透を図る。教育目標を常に意識させる。

〇学校全体の動きを常に把握して、ミドルリーダーに適切に助言する。

〇事務局・経営理事会・関係機関・保護者と職員をつなぎ、諸事において連絡調整を行う。

③ 関係機関（経営理事会・在外公館・日系企業等）との **Connections**

教頭は常に関係機関と職員をつなぐ太いパイプとなる。必要に応じて学校代表者として連絡・調整・対応を行う。相手が在外公館や日系企業である関係上、手順と段階を踏んで慎重に連絡・報告を行い、失礼のないように配慮した。

〇定期的に開催される学校経営理事会のうち、運営理事会に参加して校務報告を行う。

〇理事会の意向を職員に伝達するとともに、職員の声を理事会に届ける。

〇宿泊を伴う旅行などの学習を行う場合に、在外公館へ届け出る。

〇職員からの相談を受けた後、職業講話・職場体験学習等の依頼を行う。

④ 保護者・ＰＴＡとの **Connections**

教頭は学校の窓口としての立場にあることから、保護者やＰＴＡとは常に良好な関係を築く必要がある。そのため、保護者からの相談や苦情については丁寧に対応するとともに、学校からも職員の頑張りや生徒の成長について積極的に発信した。

〇保護者からの相談や問い合わせ、苦情には親身に対応する。

〇ＰＴＡとの連絡を密に行い、活動を円滑に進める。

〇行事や授業参観のお知らせを連絡アプリ（Sgrum）で配信する。

〇生徒に重大な問題行動があった場合、保護者に来校を求め、家庭での協力を求める。

(4) 施設・設備管理

マネジメントにおけるもう一つの役割は物的管理、つまり施設・設備管理である。これについては日本とは比較にならないほど多くの業務が存在した。施設の老朽化に加え、香港特有の湿気の多い気候のため、各所で故障や不具合が生じており、常にどこかが雨漏りし、エアコンが故障するなどして、その対応に追われた。日本と異なり、施設・設備の修繕がすぐにできないこと、教材備品がすぐに手に入らないことが度々あったため、その早急な改善が課題である。

〇教育充実費予算の管理

〇施設・設備の安全点検と修理依頼（事務局の修理専門スタッフへの依頼）

〇公用車の手配

〇清掃・消毒の依頼（清掃スタッフへの依頼）

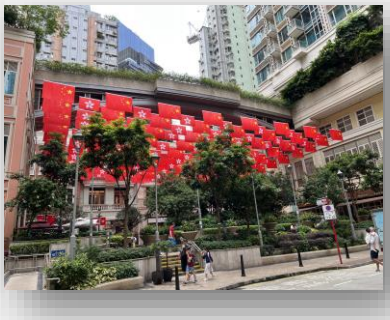
〇情報資産や物品購入依頼（ＧＭ）

4　私の香港生活　My Life in Hong Kong

海外生活の醍醐味は何といっても仕事がない週末にある。平日の業務が非常に忙しい反面、週末に思いっきり好きなことをして仕事の疲れを癒した。香港で新しく得たものはいろいろあるが、中でも私の中で大きな収穫だったのは職場の仲間や日系企業の友達、香港の友人ができたことである。日本にいるときには人間関係をあまり意識することがなかったが、異国の地で暮らす心細さもあり、香港では常に人とのつながりやふれあいを求めた。もちろん人と人とのつながりは仕事上においても非常に重要である。**私が行ってきた仕事はすべて、「人のために」「人を介し」「多くの人たちの支えがあって」できたことである。これは当たり前のことかもしれないが、改めて人と人とのつながり（Connections）の大切さについて実感できた。**

数あるオフの過ごし方の中でも、特に虜になったのは山歩きである。上述したとおり、香港は都会と自然が融合した都市であることから、その景色は独特で、どこへ行っても美しい感動的な風景が見られた。そのため週末は、いろいろな登山・ハイキングコースに挑戦し、心地よい汗を流した。コロナ感染がひどく流行した２年目には思い切って朝と夕方の通勤時にも山登りを行い、さわやかな朝陽とロマンティックな夕陽を満喫した。

このように香港日本人学校や香港での３年間の生活をとおして、**自分の考え方や働き方が大きく変わった。仕事もそうでないときも、人とのつながりを意識してその時間を大切にできた。「人と人とのつながり」私はこれからもこのことを大切にして生きていきたい。**



デュッセルドルフ日本人学校で1年間を過ごして

ドイツ連邦共和国　デュッセルドルフ
（新上五島町立北魚目小学校）
川上　登

1　はじめに

私は、デュッセルドルフ日本人学校に2024年度より教頭として派遣されています。

デュッセルドルフ市は、ドイツ連邦共和国の西部に位置するノルトライン・ヴェストファーレン州の州都です。在留邦人も多く、日本食材店や日本料理店も多くあります。

デュッセルドルフ日本人学校は、児童生徒数469名（2024年12月20日現在）で、北米欧州の日本人学校の中で最大数を誇り、増加傾向にあります。児童生徒は、明るく素直で真面目です。日本語補習校も併設されており、運動会や学習発表会は、補習校と合同で開催し、交流を深めています。

2　現地での特色ある教育活動

（1）現地理解教育の充実

本校の学校教育目標は、「豊かな心をもち、国際感覚を身につけ、学び続ける子どもの育成」です。特に、国際感覚を身につけるために、現地理解教育の一環として、「ドイツ語」と「英語」を小学部　1　年生から学習しています。デュッセルドルフでは、ドイツ語だけでなく、英語も広く通じるため、英語学習にも力を入れています。また、現地校や姉妹校、地域住民との交流、さらには現地の公共施設での学習などを通じて、学んだ外国語を使いながら、現地理解を深めることができています。各学年の主な現地理解の活動を紹介します。

○小学部1年生では、地元で開催される「マルティン行列」に参加します。マルティン行列とは、子どもたちが手作りの提灯に火を灯して、暗くなりかけた頃に歌いながら歩く秋の行事です。本校の児童も図工の学習で作成した「提灯」に火を灯して行列に参加し、歩いた後はパンを分けてもらいます。地域の方と一緒に参加し、食べ物などを分け合い、助け合うことを大切にした伝統行事に参加できる素敵な機会となっています。

○小学部2年生は、地元のサッカーチーム「Fortuna Duesseldorf（フォルトゥナ　デュッセルドルフ）」と交流しています。日本人選手も在籍しており、地域の方から絶大な支持を得ているチームです。生活科の学習の一環として、スタジアム見学や選手との交流を行っています。見学や交流活動を通して、地元のチームを地元の人たちが誇りに思い、サッカー応援を生活の一部にしているドイツの文化を肌で感じる機会となっています。

○小学部3年生は、社会科の学習の一環として、地元のスーパーマーケットや消防署、警察署を見学します。日本と同じように暮らしを支える仕組みや働く人の大変さなどを学びます。一方で、日本と比べた食材や陳列の違い、防火・防犯への取組や考え方の違いなども学ぶことができています。

○小学部4年生は、社会科の学習の一環として、旧市街地を見学します。実際の目で見て、課題を見つけ、調べて発表する活動を通して、デュッセルドルフの歴史や街の成り立ちについて、日本と比べながら学ぶ機会となっています。

○小学部5年生は、地域にある介護施設「ディアコニー」で、お年寄りの方と年に3回交流しています。お年寄りの方と簡単なゲームや折り紙などを通して、交流を深めています。相手の表情や状況を見てコミュニケーションをとったり、学習したドイツ語を使ったりする機会にもなっています。

○小学部6年生は、ドイツ国際平和村との交流を行っています。紛争や危機的状況にある地域で怪我や病気を抱えた子どもたちが治療を受けています。その子どもたちとサッカーや紙飛行機、お手玉や折り紙などを通して交流しています。相手の怪我の状況や言語の壁があっても表情やジェスチャーで楽しみを分かち合えること、平和について考える機会となっています。

○中学部1年生は、学校の近くにあるインターナショナルスクール「ISD」との交流を行っています。日本遊びや書道、アニメ、サッカーなどに分かれて交流をします。同世代の友だちと英語を通して交流し、文化の違いや考え方の違いに触れる貴重な機会となっています。

○中学部2年生は、地域にある日系のスーパーや書店、航空会社、銀行、幼稚園などで職場体験を行っています。働くことの大切さを学び、自己の職業選択の幅を広げることにつながっています。ドイツで日系企業として働く大変さや大切にしていることなどを直接体験する場にもなっています。

○中学部3年生は、修学旅行でベルリンに行き、ベルリンの壁や収容所を見学し、ドイツの戦争の歴史や平和について学びます。ベルリン市内で班別行動も行い、調べ学習やドイツ語を使って現地の方にインタビューをする活動なども行っています。

○本校では部活動として、箏部と太鼓部があります。練習は週に1～2回程度行っており、学習発表会やオープンデーで発表しています。そして、毎年、6月頃に開催される日本デー「Japan-Tag」と呼ばれるヨーロッパ最大級の日本文化の祭典の場に出演し、日本文化を発信する一翼を担っています。

(2)特別支援教育の推進

教育上特別の支援を必要とする児童生徒に対し、個別の指導教室「Bitte ルーム(日本語で「どうぞ」)」を開設しています。児童生徒一人に対し、週に1回程度、発達障害等による学習上または生活上の困難を克服するための教育を行っています。特別支援教育コーディネーターを中心とした支援体制を強化し、チームとして、個別の教育的支援や不登校傾向の児童生徒への対応を行っています。来年度の通級指導教室の開設に向けて、文部科学省への申請や準備も行っています。

また、今年度は、海外子女教育振興財団による AG5事業「遠隔支援コンサルテーション」も実施しています。遠隔支援コンサルテーションは、オンライン(テレビ会議システム等)を活用し、特別な支援を必要とする子どもへの指導・支援の方法や悩みを、日本人学校の教員と日本の特別支援学校等の教員と一緒に共有する取組です。今年度は、年3回実施し、日頃の悩みを相談でき、専門的な助言をいただける環境があるのは大変ありがたいと感じています。

このように外部機関との連携も図りながら、特別支援教育を推進していきたいと思います。

3 現地の生活・文化体験

ドイツには、「家族や友人との時間」や「心の健康」を大切にする文化があります。例えば、日曜日は法律「閉店法(Landenschlussgesetz)」により、デパートやスーパーなどの小売店が閉店します。また、「Ruhezeit(休息時間)」にも注意が必要で、日曜は終日、平日も早朝・昼・深夜の騒音を禁止する決まりがあります。休みの日は、のんびり静かに過ごすことがドイツ流の休みです。この時間を利用して、家族や友人とリラックスした時間を過ごすことが推奨されており、心の健康を重視する文化が根付いています。「日曜のパパとママは僕らのもの」というキャッチフレーズも存在するほどです。日曜日には多くの人が家族で散歩を楽しんだり、公園で遊んだりしています。

私自身も最初は日曜日にお店が閉まっていることに、不便さや戸惑いを感じていましたが、今は慣れました。土曜日までに計画的に買い物を済ませ、日曜日はお店が閉まっているので必然的にゆとりのある時間が生まれます。日曜日は、家族との時間や友達、同僚との時間を有意義に使ってリフレッシュすることができています。ドイツのように、休むときは休むというメリハリをつけた時間の過ごし方は、日本に帰っても実践したいなと感じています。

4 違いから分かる日本の学校教育の良さ・改善点

ドイツでは小学校5年生になる際に、手工業または技術系のスペシャリストを目指す道、または進学して研究者や士業等を目指す道を選ぶことになります。そこに偏差値教育はなく、自分が誇りを持って生きていく道を築くための準備期間として教育を受けることができます。

日本では、大学で学んだ専攻とあまり関係のない仕事をしている学生が多いように思います。教育と職業が分離している状況があり、キャリア教育の大切さを改めて感じています。

今年度、本校でもキャリア教育の一環として、パリオリンピック総合馬術団体日本代表「初老ジャパン」の選手や、日系企業の出前授業などを活用して、職業講話をしていただきました。講師の方が「好きなことを仕事にしている」という実体験をもとにしたメッセージなどが子どもたちの心に響いていました。日本に帰国してもキャリア教育に力を入れていきたいと思います。

5 ICT を活用した実践事例

本校では、今年度の6月より、一人一台端末（iPad）を導入しています。昨年度から整備に向けて取り組まれてきていましたが、端末の初期設定やフィルタリング・学習支援ソフトの導入、業者との折衝など、日本であれば教育委員会にしていただけることを情報委員会が中心に行ってきました。正直大変でしたが、子どもたちが端末を使って、調べたり、表現したりする様子を見ると必要なことだったと感じています。職員も一人一台端末が配付されていて、会議の資料などは校内フォルダやメールでデータを共有し、ペーパーレス化を図っています。

6 帰国後に実践してみたくなったこと

〇ドイツでは多くの人が英語を話すことができます。英語とドイツ語は同じゲルマン語に属する言語であることから、英語は学びやすい言語のようです。それでも、現地の学校では、小学校3年生から週に2回程度、英語の授業が設けられていて、授業数では日本の学校と大きく変わりません。現地の小学校の英語の授業を参観したところ、英語でのコミュニケーションを重視され、未習・既習にかかわらず、表現したいことは辞書や翻訳アプリを使って好きなように表現させていました。ドイツにおける英語教育の良さを授業と制度の両面から調べ、日本の外国語教育に活かせることを実践したいと思います。

〇本校は、小中併設校である利点を生かし、小学部と中学部で授業を見合う取組を進めています。教員一人1回は公開授業を行っており、幅広く研究授業に取り組んでいます。教科ごとに、小学校と中学校の教員が互いの授業を見合い、教科としての系統性や発達段階において大事にすることなどを活発に協議しています。授業レベルでつながる小・中連携を帰国後も実践したいと思っています。

まだ日々の業務をこなすことに精一杯ですが、ドイツの教育の良さを学び、日本人学校での実践を通して、長崎県の学校教育に活かせることはないかを探っていきたいと思います。

求められるのは「できて当たり前」「やって当たり前」の即戦力

ニュージャージー日本人学校
（平戸市立平戸小学校）
吉田　優

野うさぎ・自宅駐車場

「ニュージャージーってどこ？」
「ニュージーランドとは別だよね？」
私がニュージャージー日本人学校に派遣されることを知った知人からはこのような声も多くあった。そんな質問があった時に大抵理解してもらえる答えが、
「ニューヨークからは自由の女神が正面に見えるが、ニュージャージーから見ると自由の女神の背中と後頭部が見える」である。在外教育施設への派遣希望志願書を提出してから約７か月後、日々の業務で忘れかけていた頃に、校長からニュージャージー日本人学校への派遣が決まったことの知らせを受けた。この時校長からも「ニュージーランドじゃないよ」と一言添えられたことが今でも忘れられない。

ニューヨーク州とハドソン川を州境にしたニュージャージー州は、アメリカで五番目に小さい州で、岩手県よりひと回り大きく、緯度は青森県とほぼ同じである。学校周辺は緑豊かで、リスや鹿、野うさぎなどの野生動物をほとんど毎日見かける。一方で NY の中心部、マンハッタンへは電車で最短４０分という立地で、大都会と自然を同時に感じられる地でもある。２学期終業式翌日には１０cm の積雪があり、車を購入した時の付属品である道具を使い、人生初の車の雪かきをした。

タイムズスクエア
マンハッタン

ニュージャージー日本人学校は、１学級あたりの人数が１０人以下の小規模校である。在籍している児童生徒は、アメリカで生まれて一度も日本での生活経験がない子や、小学生にして４か国目の海外生活を経験している子、他国の日本人学校やインターナショナルスクールから転入してきた子、アメリカの現地校から転入してきた子、両親のどちらかが外国人で、家庭では日本語以外の言語を使っている子など、そのバックグラウンドは様々である。共通していることは、将来的には日本の中学校または高等学校に進学を希望していることであり、そのため日本人学校に在籍しているという場合が多い。

日本では経験したことのない超小規模校での勤務が始まったのだが、ニュージャージー日本人学校での初めての経験は他にもある。それは、教科担任制を導入していることである。中等部においては、すべての教科の教員がいるわけではなく、私の場合、所有している中学校免許状である国語の中等部３学年の授業を担当することになった。小学校での勤務経験しかなかった私にとって、中等部の授業の教材研究や定期テストの作成、成績処理などの業務はすべて初めての経験であるが、持ち時間の半分以上が中等部の国語の授業だ。当然のことながら、まったく余裕のない１学期で、当時の心境は、「中学生に国語の授業を教えるために来たわけではないのに」であった。しかし、そんなことは関係ない。中等部の授業を担当すること、教科担任制を導入していること、免許外の指導をすること、他校種の担任をすることなどは、在外教育施設ではどれも可能性として十分あり得ることで、志願書を提出する前からわかっていた。ましてや私は中学校の免許状を所有している。これが在外教育施設の現状であり、任せられた職務を遂行することが派遣された私の仕事であると自分の中で理解するのに、そんなに時間はかからなかった。ただ、自分の学級の授業が１日１時間、多くても２時間しかないことには未だに慣れない。今年度私が担任をしている６年生の担当教科は、国語、道徳、学級活動、総合の４科目なので、朝の会を終えると、「See you lunch time.」と言って中等部の授業に行く日も多い。今後派遣を希望する場合、これらのことも念頭に置き、１学期の私のようなポンコツ教員にならないよう、事前に心の準備をしておくことをお勧めする。

八重桜の絨毯･NJ 校･校門

スクールバスでの登校風景

次に、アメリカならではの特色ある教育活動についてである。本校はアメリカならではの授業や行事を多く取り入れている。例えば、初等部１年生から米人講師による ART や ESL の授業が行われており、全校児童生徒がオールイングリッシュで授業を受けている。行事では、パンプキンピック（初等部遠足)、ジャック・オー・ランタンづくり（ESL)、ハロウィンデー（全校児童生徒・教職員が仮装して一日を過ごす)、アップルピッキング（初等部遠足)、NY 国連本部見学（６年社会科見学)、アメリカ独立の地であるフィラデルフィアへの校外学習（４～６年宿泊学習)、現地校との交流

学習（初等部・中等部）、ホワイトハウス内部見学を含むワシントンD.C.への校外学習（中等部宿泊学習）など、１・２学期だけでもこの地ならではの行事をたくさん経験した。日本と同等の教育を目指している日本人学校ではあるが、ニュージャージー州で生活しているからこそ経験できることや、英語教育に力を入れていることを、アメリカにある日本人学校の強みとして、教育活動を展開している。また、その成果は確実に表れており、小学校低学年で英検４・３級、高学年で準２・２級、中等部で準１級・１級を取得している児童生徒が複数おり、児童生徒の英語力の高さを実感している。一方で、家でも学校でもほとんど日本語を話して生活している私は、そんな子どもたちを見習い、さらにはアメリカで生活する上で最低限の英語力を身につけたいと思い、オンライン英会話の受講を始めた。現段階では理想には程遠い英語力であることも申し添えておく。

売り場に山積みのパンプキン

　そして、アメリカでの生活・文化体験についてである。先日訪れた Costco でこんな出来事があった。衣料品売り場で商品を見ていると、近くで５０代くらいの女性がアウターを試着していて、「これどう思う？ちょっとぴったりすぎかなあ？もう一つサイズアップした方がいいと思う？」と聞かれた。私は「うーん、どうかな、どちらかと言うとサイズアップした方がいいかな」と、なんとも日本人らしい曖昧な返事をしたのである。その後女性は「OK!あなたがそう言うならこれはママに買って私はサイズアップしたものを買うわ！」と、見ず知らずの私の曖昧な返事を受け入れた。また、旅行で訪れたジョージア州のサバンナという街を歩いていると、アメリカらしい特大のピザを食べている老夫婦がいた。目の前を通り過ぎようとした時、「この大きさで５ドルなのよ。安いでしょ！これは絶対にお勧めするわ！手はこんなにチーズだらけになるけどね。」と言ってきた。なんと答えるべきなのか、どうリアクションするのが正解なのかと思っていたのも束の間、在米２０年超の姉がすかさず、「それはいいねー！ぜひ晩御飯にここのピザを選ぶわ！いいことを教えてくれてありがとう！」と答えていた。これらをフレンドリーと言わずして、他に何をフレンドリーと言うのだろうかと思うような、ピカイチのフレンドリー体験であった。

クリスマスオブジェ
ジョージア州・サバンナ

　アメリカのハロウィンやクリスマスの民家の装飾が華やかなことは誰もが知っているだろう。しかし、アメリカ人全員がハロウィンやクリスマスを祝うわけではない。日本ではクリスマス前によく「Merry

Christmas！」というフレーズが飛び交っているが、こちらではあらゆる宗派に配慮して、「Happy Holidays！」と言うことがモラルであることも知った。

NY のクリスマスのシンボル
ロックフェラーセンター

最後に、日本人学校での勤務を経験して感じた、日本の学校教育との違いについてである。多くの在外教育施設は２～３年で派遣教員が入れ替わる。業務の引き継ぎや学級・学校経営、進路指導や行事の見直しなど、長期的な視点で計画したり、実行したりすることの難しさを感じている。さらには、国内で参加していたような研修の機会が少ないこと、学習指導に関する日本の書籍が手に入りづらいことなど、授業をする上で不便な場面も少なくない。それに関連して、校内研究の内容も単年で研究テーマが変わり、短期的な研究になりがちであること、小中連携した効果的な研究テーマを設定することなども課題として挙げられる。

しかし、近年日本で大きく進歩している働き方改革については、本校にはまだ浸透していないと感じる。令和６年度に派遣された私たちより年次が上の派遣教員のほとんどは働き方改革を国内で経験しておらず、日本の働き方改革の実情の一部を話すと驚かれる。それらとは別に、日本人学校ならではの課題もある。本校では、初等部１年生から中等部３年生までが一律で１日７時間、週５日の授業を行っているが、スクールバス運行の都合上、学年による授業時数を変えることができない。当然放課後に学級事務をする時間は短くなる。さらには、これはアメリカ特有のことだが、日本のように昼休みに子どもたちが自由に外に出て自由に遊ぶことができない。中休みと昼休みの外遊び時には、監護当番の教員がトランシーバーを持って決められたあらゆる場所に立ち、子どもたちの安全に目を光らせている。休憩時間もなく放課後になり、あっという間に退勤時間を迎える日々である。

JFK 空港にてジーコ氏と

とはいえ、都市部では導入されつつあるという教科担任制をひと足先に経験することができていること、全国の各地の教員の指導や考え方を知ることができること、多様なバックグラウンドをもつ児童生徒と関わることができることは日本人学校で勤務しているからこそ経験できることである。帰国後はこの経験を惜しみなく子どもたちに伝え、広い視野をもち、「将来はグローバルに活躍したい」という意志をもつ子どもたちに育てるべく、日本での教育に携わっていきたい。

平和の港　香港に赴任して

香港日本人学校香港校
（大村市立郡中学校）
兼松　諒

1　現地での特色ある教育活動

私は香港日本人学校香港校中学部に勤務させていただいています。学校は小中一貫校で、教育目標を「世界で活躍するグローバル人材の育成」としており、生徒個人の能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成として必要とされる基本的な資質を養うことも経営理念の一つとしています。そのため、小学部では英語が毎日1時間、図工は英語によるイマージョン教育を行っています。さらにグローバルクラスでは二人担任制で、授業の多くがティームティーチングであり、よりきめ細かな指導を目指しています。また中学部では私たち日本人の英語教師による、学習指導要領に基づいた指導を行う英語の授業と、ネイティブのスタッフによる English の2種類の授業があります。また、英語と English のどちらの授業も4コースに分かれた習熟度別授業を行っており、少人数での授業のため、発展的な内容から基本的な内容まで幅広く支援することができ、個別最適な学びにつながっています。特に English の授業ではネイティブスタッフも充実しており、内容も、英語コミュニケーション能力を身に付ける授業や、分析力やプレゼン力を磨く教育を展開しており、グローバル人材育成のための環境が整っています。

しかし、世界で活躍する人材を育成するためには、言語力や学力だけではないと考えています。そこで、私が担当している1年生では、5月に、香港にある島の一つである長洲島で宿泊学習を行いました。宿泊学習では、体験を通して学年・学級の仲間と交流し、自己理解や他者理解を深めたり、集団行動を通して仲間と協調し、仲間を思いやる心を育てたりするという目的で、自然体験活動や野外料理を通して教科書では学ぶことができない大切なことを体験することができます。また、現地の学生と触れ合う経験として、香港中文大学で日本語を学んでいる大学生との交流会を行いました。交流会に向けて香港の歴史や文化に対する理解を深めるために「香港ガイドブック」を作成しました。ガイドブックでは、生徒一人一人が食べ物や公共交通機関、観光地など興味のあるものについて調べ、日本語を学ぶ大学生に対し、より伝わりやすく、理解してもらうためにはどうすればよいか工夫を凝らしながら、プレゼンテーションを作成しました。交流会では日本語と英語を使ってコミュニケーションをとり、準備したプレゼンテーション発表を行い充実した会になりました。

このように、体験活動や交流活動など学校生活すべてを通して人間形成も大切にし

ています。香港には非常にたくさんの自然や設備、施設があります。そのような現地の教材を有効に使うことができ、学校だけでなく多くの場所で学ぶことができる価値ある環境の下で教育活動を実践することができています。

2 現地の生活・文化体験

香港で生活して約9か月が経ちました。日々新しいことを経験させていただいています。香港は広東語に加え、旧イギリス植民地だったことから英語も多く使われています。日常も英語が通じるため、不便なことはありません。歴史的にみると日本との関わりから注意して行動しなければならない日もありますが、概ね治安もよく、施設や設備も充実しており、安全な生活を送ることができています。また、特に感じたことは香港の人々は優しいということです。道端やバス内で困った人がいたら手助けしている場面をよく見ますし、私自身家族で出かけた際にも小4と小1の息子たちによく話しかけてくれます。そのような安心感の中、充実した生活を送ることができています。買い物に関して驚いたことは、物価高騰により感覚としては日本の2倍の値段で物を買っていることです。（例えば100円ショップでは200円で買うイメージ）食事についても同様で、家計的には正直苦しいところもあります。しかし、考え方を変えると、そのおかげで家族は物をいかに安く買うか生活の中で実践しながらいい意味で楽しむことができています。また、香港は都会と自然が多く融合しており、移動や買い物も不便なくできます。また、香港特有のイベントも多く開催され、気軽に見に行くこともできるので家族で楽しみながら生活することができています。

3 違いから分かる日本の学校教育の良さ・改善点

これまで日本の学校で勤めてきて、教科の授業、道徳や総合的な学習の時間、体育や部活動といった知・徳・体のバランスのとれた教育が日本の教育の良さだと感じてきました。しかし、香港日本人学校に勤務して、例えば家では日本語と中国語や英語で会話する生徒、日本人だが日本に住んだことがほとんどない生徒やミックスの生徒など本当にさまざまなバックグラウンドをもった生徒たちがいることを知りました。指導のバランスも大切ですが、世界的にみると「個」それぞれの良いところを伸ばす教育をしていかなければ教育とは言えないのではないかと考えるようになりました。もちろん揃える教育も必要な場面はあると思いますが、同調圧力が生まれるなどの不安もよく聞きます。これからの日本もすべての子どもたちの可能性を最大限引き出せるように個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が必要であると感じています。「国や社会に対する18歳意識調査」において、『自分を大人だと思う（29.1%）』や『自分で国や社会を変えられると思う（18.3%）』と結果が

出ているように自己肯定感や自信が低い結果が出ています。

香港の生徒たちと関わる中ではあまりそのようなことを感じません。全員ではありませんが自己肯定感や自信はもっているように感じます。やはり、多くの文化の中で学んだ経験というのは人柄や考え方にもいい影響を与えるのではないかと感じています。日本での教育でもそのような気持ちや考えも育んでいくためにはどのような教育が必要かを考え、実践していきたいと思っています。

4 ICT を活用した実践事例（授業づくり 学級経営・学校経営）

ICT 活用はこの時代には必須であり、教育効果をより高いものにするにするために、アプリケーションやクラウドの有効活用を行いたいと考えています。実際日本と大きな変わりはなく、不便なく一人一台端末を使うことができていますので、日々の授業で活用しています。

香港校の生徒たちは一人一台端末として iPad を使っています。その中でもロイロノートや Google といったアプリケーションを主に用いており、授業だけでなく、課題や自分が必要だと感じたときにすぐに使える環境が整っています。今年度の実践事例としましては、「学級の諸問題について考える」というテーマで学級会を行いました。その際、班での話合いの後、意見の開き合いの場面でロイロノートを用い、スクリーンに映すことで共有しました。このアプリは同時編集ができるため、意見を出しながら意見を聞くだけでなく、スクリーンを見て話合いを進めることができるという利点があります。また、①現地での特色ある教育活動の中で少しふれましたが、現地理解教育（国際理解）として香港中文大学の日本語を学んでいる大学生との交流会では香港の観光スポットや食べ物、交通機関などについてガイドブックを作成し、プレゼンテーションを日本語と英語を交えながら行いました。その際、より伝わりやすい発表となるよう、Google スライドを用いたり、写真を集めてまとめたり、効果的な使い方になるようにしました。

ICT を使う上で大切にしたいのは、「教える」ことではなく、「学び」につながることだと考えています。このプレゼンテーションでも、どのアプリを使ってもよいようにし、生徒たちにとって発表しやすい方法を選択させ、準備させました。そして、改めて ICT 活用の主体は生徒であり、個別最適で主体的・対話的で深い学びつながっていくのだと実感することができました。

5 帰国後に実践してみたくなったこと

育った環境や生活など、様々なバックグラウンドを抱えている生徒たちがいることは前述しましたが、日本でも同じだと考えています。それぞれにとって最適な学びとなるよう、また、生徒同士の尊重や理解など、よりよい人間関係構築につながるような授業、学校生活を実践していきたいと考えています。例えば、国際理解や語学学習をより充実させるために海外に進出している企業の話をうかがう機会を作ったり、英語科の授業では会話をより充実させたりしていきたいです。日本の中学生は英語を話せないとよく言われますが、「正しく話すこと」にとらわれ、勇気が出ないのだと考えています。コミュニケーションとは情報を伝えることが目的のため、「伝わればそれでよい」ということを教えたいです。そのためには英語を使う場面をいかに増やすか、通じれば OK という環境をいかに生み出すかを実践していきたいと考えています。そのために授業での生徒の会話も「通じる」英語で十分であることを伝え、何度も繰り返しながら挑戦させながら定着させていきたいと考えています。もちろんその上で正しい英語を学ぶことでより英語力もついてくると考えています。

また、総合的な学習の時間などではフィールドワークや自然体験活動を通して教科書では学ぶことができない充実した社会実践を積む授業を計画したいと考えています。様々な考えを持った仲間たちと共に考え、活動することで言葉や経験も積むことができ、本当の意味でのグローバル教育の実践につながると考えています。

限られた授業数の中でより効果的な授業にするためには ICT は切り離せません。ICT を有効活用し、生徒が主体的に使いこなすことで「学び」につなげ、現地に行かなくても体験できるメリットを引き出し、香港をはじめとする海外の学校とのオンライン交流など計画し、お互いの生徒たちにとって有益な授業となるよう、スマートなカリキュラム実践とマネジメントにつなげたいと思っています。

最後に、まだ香港に来て1年も経っていませんが日々の学校生活に刺激を受けながら生活することができています。これからさらに多くの体験ができると考えるとワクワクしてきます。香港の生徒たちのために、そして帰国後長崎県の生徒たちのためにできることを考え、力にしていきたいと強く感じました。